ジャン・グレーシュ氏の二つの講演について

杉村靖彦

以下に収録するのは、ジャン・グレーシュ氏（パリカトリック大学名誉教授）が、2007年 9 月に日本学術振興会の外国人招聘研究者として来日した際に東京で行った二回の講演の邦訳である。氏はリクール研究の第一人者として世界的に有名であると同時に、仏独バイリンガルという語学的才能を生かして、フランスのハイデガー研究をリードしてきた。とくに、1994 年に刊行された『存在と時間』の詳細な注釈書(Jean Greisch, *Ontologie et temporalité. Esquisse d'une interprétation intégrale de* Sein und Zeit, Paris, PUF.) は、フランス語圏では類例のない仕事であり、ハイデガー研究の基本文献として信頼を得ている。昨年の招聘は、筆者も含めた京大宗教学の中堅・若手研究者のグループの手でこの書が訳出・刊行された（『『存在と時間』講義―統合的解釈の試み―』、法政大学出版局）ことを直接の機会として企画されたものである。なお、その折には京都でも二回の講演をしていただいたが、それらは哲学的人間学の現代的可能性の掘り起こしを図る氏の最近の研究に関わる考察で、まもなく刊行予定の新著に収められることになっている。

以下に訳出した二つの講演について、ごく簡単に紹介しておく。

「為しうる人間と承認(再認)の理念―ポール・リクールを讃えて―」は、『形而上学・倫理学雑誌』のリクール追悼特集号に掲載された論文(« Vers quelle reconnaissance ? », *Revue de métaphysique et de morale*, No.50, 2006, p.149-171)を、日本での講演向けにアレンジしてもらったものである。リクールが死の前年に刊行した最後の著作『承認の行程』を丁寧に読み解き、そこからリクール哲学の歩みを照らし返すことによって、「為しうる人間 (L'homme capable)」という観念に収束していくこの哲学の有り様が多角的に描出されている。1990 年の『他者としての〔のような〕自己自身』以降、2000 年の大著『記憶・歴史・忘却』を経てこの最後の著作に至るまで、リクールの思索は驚くべき進展を遂げたが、その詳細はわが国ではまだ十分に紹介されていない。この論考は、その欠落を埋める貴重なガイドとなりうるものである。

「一体なぜ〈なぜ〉なのか―ハイデガーとキリスト教神秘主義―」は、2005 年にドイツのマインツ大学で行った講演を、日本での講演向けにアレンジし、フランス語で書き換えてもらったものである。この論考は、アンゲルス・シレジウスの有名な詩「何故無しに」

の引用から始まるが、ハイデガーとエックハルト等の神秘主義との関係を直接主題とするのではなく、『存在と時間』の直後のいわゆる「現存在の形而上学」期から『哲学への寄与論考』や『省慮』を経て『根拠律』に至るまでのハイデガーの思索における「何故？」の問いの位置づけの変遷を辿ることを通して、「何故無しに」が意味をもちうる境位への通路をあくまでハイデガーの思索の内側から切り開こうとしたものである。博識と柔軟な思考力、アイディアの豊かさと目配りのよさを身上とするグレーシュ氏のハイデガー研究の特質がよく表れた好論文である。

　最後に、この二つの論考を本誌に掲載することを快く許可して下さったグレーシュ氏に、この場を借りて心より感謝を申し上げたい。